



【埼玉県熊谷市】

診療所の
IT活用事例

1

まつだ整形外科クリニック

院長 松田 芳和氏

稼働電子カルテシステム

Medicom-HRシリーズ
(パナソニック ヘルスケア)

患者動向状況の包括的把握により 在院時間を短縮し、満足度が向上。 法人2施設間のIT連携も良好

2010年に開業し、現在は1日300人以上の患者が訪れるまつだ整形外科クリニック。その多忙な診療支援ツールとして松田芳和院長が選んだ電子カルテは、パナソニック ヘルスケアの「Medicom-HRシリーズ」だった。同院長は17年10月に分院として「健康スポーツクリニック」を開業。同施設に最新型の「Medicom-HRV」を導入し、両施設で連携しながら診療を行っている。「患者動線の円滑化には、全職員的な患者動向状況の把握が不可欠」と語る松田院長に、法人2施設のIT化計画を中心に聞いた。

システム選定で重視したのは 使いやすさとベンダの対応

——開業に際して構想されていたIT化計画についてうかがいます。

現在、法人合計で約40名のスタッフが2施設の診療に携わっていますが、本院（まつだ整形外科クリニック）開業時のスタッフは5名でした。つまり、現在とは比較にならない人的規模で診療していたがゆえ、開業当初に電子カルテに求めた要件はごくごくシンプルであり、最も重視した点は「診療支援ツールとしての使いやすさ」でした。また、私が開業した2010年当時は診療所向け電子カルテが成熟期を迎えていた時期で、基本機能は各社遜色のない水準に達していたこともあり、優劣の差が如実に表れる「ベンダのサービスと対応」も重視した選定要件に挙げられます。

主にこれらの点から比較検討した結果、パナソニック ヘルスケアの医事一体型電子カルテシステム「Medicom-HRシリーズ」に決めたのですが、以来、診療の頼もしいパートナーとして満足して使っています。

——具体的には、「Medicom-HRシリーズ」のどの点を評価されていますか。

冒頭述べた「使いやすさ」の基準とし

て、「画面（診療情報）の見やすさ」や「操作（入力・閲覧）のしやすさ」などが挙げられます。基本性能は同じ水準だったとしても、機器の使用感は深層心理的に微妙に異なり、それは使いこなすにつれて次第に気になってくるものです。こうした点において「Medicom-HRシリーズ」は、比較検討時に長く付き合えると感じました。今はその直感が正しかったことを日々、実感しています。

また、電子カルテと画像ファイリングシステム、および検査機器との連動性についても、十分に納得のいくものでした。特に整形外科は画像を多用する診療科だけに、それらの連動性は診療効率、引いては診断・診療の質を大きく左右することになります。その点、「Medicom-HRシリーズ」を起点とした連携はスムーズであり、ストレスなく画像情報を閲覧・活用することができています。なお、「Medicom-HRシリーズ」はレセコン時代から定評のあるベンダの製品ゆえ、電子カルテと医事会計との相性の点は、最初から全く心配していませんでした。

——患者数の増大に伴いスタッフを増員するにつれて、電子カルテに求める要件はどのように変わったのでしょうか。

患者数が1日数百人単位に達した結果、電子カルテには必然的に「院内の患者動

向状況をリアルタイムに共有する機能」を求めることとなりました。換言すると、スタッフ全員が電子カルテを介して、患者さん個々の現在の動きを把握して自発的に動くことにより、シームレスかつ効率的な院内の患者動線を作り出したかったのです。

現在の主な診療の流れを説明します。本院では看護師が問診を電子カルテに入力し、その結果をもとに彼女たちがレントゲンや骨密度測定の検査オーダーを行います。オーダーは全ての電子カルテ端末で閲覧できるため、診療放射線技師は指示を受けて検査を行います。ただし、オーダーが出されていても、技師がそれを確認した際、患者さんが注射などの処置を受けている時もあり、その情報も電子カルテ画面に表示されます。この場合、技師はフリー状態の患者さんを優先し、オーダー順を逆にして検査を実施します。このように、電子カルテ画面の情報を軸に各部署のスタッフが臨機応変に動くようになったことが患者さんの在院時間の短縮につながった結果、1日300人以上の診療・治療をほぼ滞りなく実践できています。

本院の電子カルテ端末は必要に応じて適宜増設し、現在は18台まで増えています。ベンダはこうしたシステム導入後

Clinic Information

まつだ整形外科クリニック



住所：埼玉県熊谷市弥藤吾180-1
電話：048-567-0753
標榜科目：整形外科、リハビリテーション科

整形外科全般に加え専門外来を設置 リハビリテーション提供体制も充実

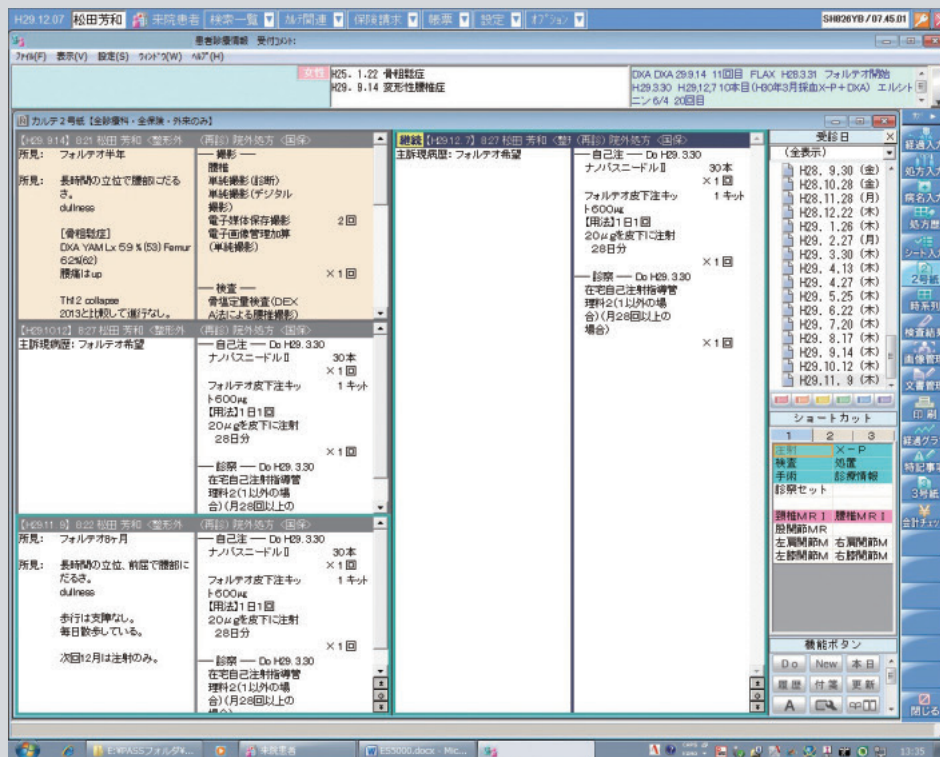
「患者さんに優しく、レベルの高い医療の提供」を診療理念に掲げ、2010年5月に開業。設備面では、前者は「バリアフリーな院内環境、全て自動ドアの入退出、90台の駐車場」、後者は「MRI、レントゲン、骨密度測定器の導入」に代表される。

整形外科とリハビリテーション科を標榜しているが、専門外来として肩・肘外来、スポーツ外来、股関節外来、頭痛外来を日時指定

の完全予約制で実施。また、理学療法士が常駐する理学療法課では、患者個々の状態に合わせて徒手療法や運動療法を予約制で行う。その他、検診コースとして、脳ドック検診と骨粗鬆症市検診を受け付けている。

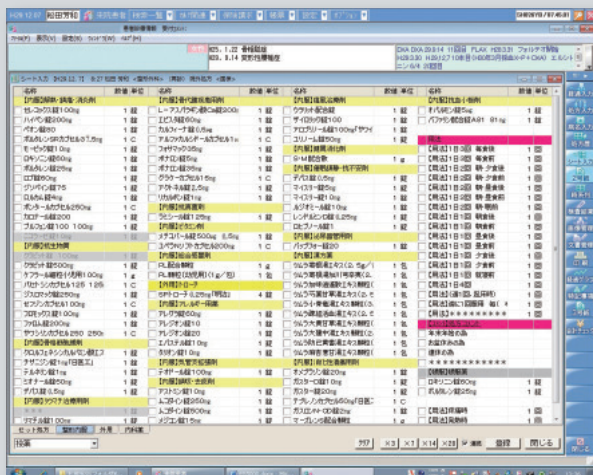
スタッフ数は法人全体で41名。内訳は常勤医師2名、看護師10名、診療放射線技師2名、理学療法士9名、医事課8名など。1日の平均患者数は現在、320～330名。

メイン画面（本院）



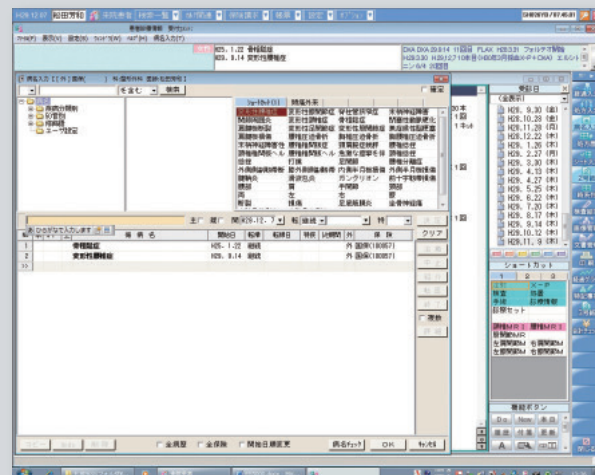
2号紙画面には患者情報の他、メモなどを常時表示。画面を切り替えずに過去カルテを参照できるなど、電子カルテとしての多彩な基本機能が特徴

シート入力画面



薬や検査、主訴、所見、病名などの情報をリスト化した画面から選択して入力

病名入力画面



病名入力時に、病名を選択入力できるだけでなく、病名チェックでレセプト病名の登録漏れ等のチェックも可能



リハビリ室で患者カルテを閲覧可能とすることでリハビリの質と安全性が高まる



リハビリルームは「極力広く快適に」という方針からスペースとレイアウトを決定

まつだ整形外科クリニック システム構成図



受付にはデスクトップ
端末を3台設置。医事
一体型ゆえ事務処理作
業を円滑に行える

MRI操作室端末では
検査リストのみなら
ず対象患者の現況も
把握できる



の要望にも迅速かつ的確に応えてくれるので、とても感謝しています。

なお、この理想的な患者動線の実現には、「Medicom-HRシリーズ」の特色の1つであるシンプルな操作性も貢献していると私は受け止めています。現在の患者数を考えると、新人スタッフが操作を覚えるのに時間がかかったり、慣れても入力に手間取ったりするようでは、円滑に診療が回るはずがないからです。

——患者動向状況の共有に当たって電子カルテ関連で工夫された点がありましたら、お聞かせください。

ごく一般的な方法ですが、スタッフ全員が患者さんの現在を把握できるようにするための雛形を制作し使用しています。これもシンプルで分かりやすいようにという方針に則り、MRIや骨密度などの

検査、処置、理学療法などの項目を立て、チェック式で受診状況がひと目で分かるようにしてあります。その他、コメント欄を付けて、例えば「この患者さんはアルコール被れが出るから、アルコール厳禁」など、気づいた点を各自に書き込んでもらい、患者さんの情報をより詳細な形で共有できるように工夫しています。

一方で、コメント欄は薬アレルギーなどの伝達ツールとしても活用していますので、医療ミスの未然防止にも少なからず貢献しているのではないかと考えます。

検査・リハ予約の電子化とデータベースの構築を予定

——昨年10月に開業された健康スポーツクリニック（分院）のIT化についてうかがいます。

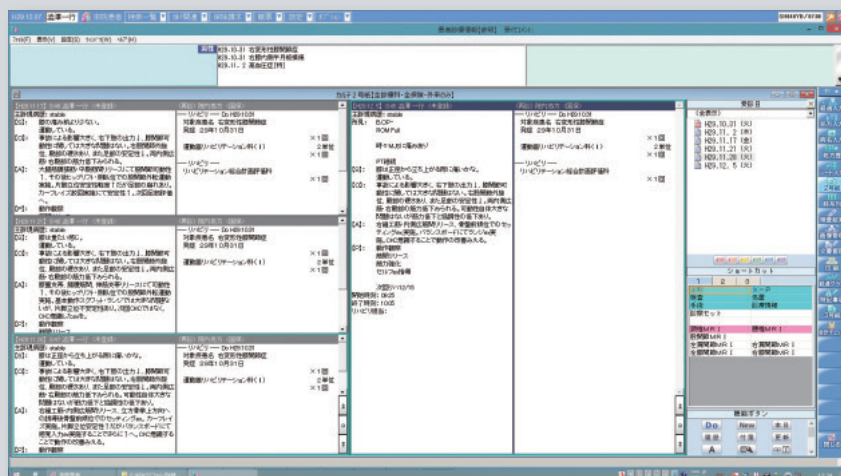
高齢社会下の健康寿命の伸張や生活の質向上の支援を目的に、「医療とスポーツと食の融合」をコンセプトとし、メディカルフィットネスとカフェを併設した健康スポーツクリニックを開設しました。分院のIT環境は本院のシステムを進化させる形で構築し、電子カルテは最新型の「Medicom-HRV」を導入し、併せて電子カルテ端末画面の大型化や保険証リーダーの導入などを実施しています。

電子カルテ端末は、診察室、処置室、受付等に合計12台を設置しました。運用は本院同様、患者動向状況のリアルタイム共有が可能な形としており、同じチェック機能等を有する仕様となっています。

——本院と分院の電子カルテ連携の概要をお聞かせください。

本来は2施設双方向の情報閲覧を実現

メイン画面（分院）



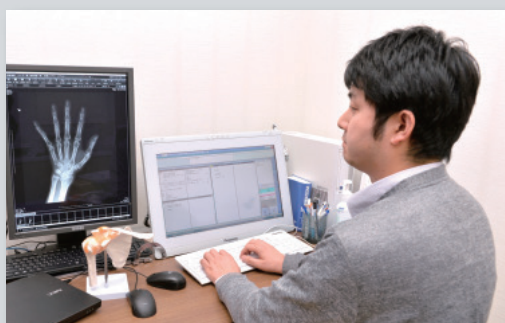
健康スポーツクリニックに導入した「Medicom HRV」の2号紙画面



建物左奥が健康スポーツクリニック。右側はメディカルフィットネス「fine」



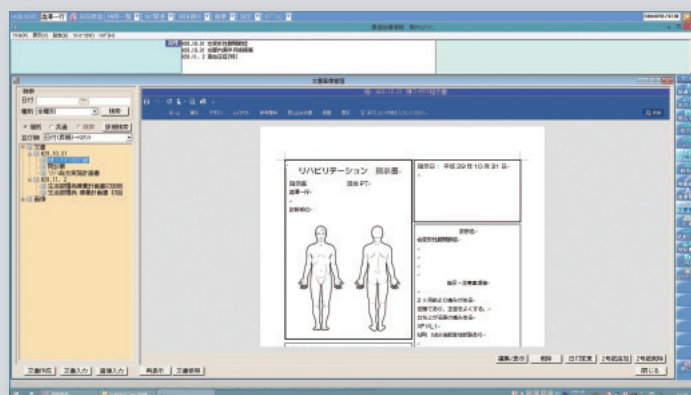
処置室の電子カルテ端末にはノートPCを採用



■ 澁澤一行院長のコメント

『「Medicom HRシリーズ」はドラッグ&ドロップなど手作業的な入力がしやすく、とても使いやすいという印象をもともと持っていました。その他、ワンクリックで情報呼出等ができる機能が多くの点も評価対象として挙げられます。分院の電子カルテは、端末が大型化されたことで画面が広々と使える点がいいですね。私は必要に応じて研究的な要素も取り入れて所見を書いているので、将来的には疾患群別の情報収集・分析を行いたいと思っています』

リハビリ指示書表示画面



リハビリテーション指示書を電子カルテ画面上で確認可能。スタッフ間の情報共有の面においても役立つ

したかったのですが、予算の関係もあり、分院から本院のカルテを見られるようにしてあります。分院には、上肢など、澁澤一行院長の専門領域の疾患でこれまで本院に通院されていた患者さんを段階的に移行しているのですが、本院のシステムで管理する既往歴や服薬歴、検査歴等などのデータを分院で閲覧可能にしています。

私は開業から1ヵ月間、分院でも診察していたのですが、本院データの閲覧を容易かつスピーディに行えました。また、「Medicom-HRV」は最新型だけにサクサク動いて、より使いやすくなっていると感じましたね。

——電子カルテ活用をより効率的にするための今後の計画について、概要をうかがいます。

現在は紙ベースで運用している検査や

リハビリの予約の電子化を計画しています。特に検査に関しては、例えば分院でMRI検査の必要性が生じた場合、現状では本院に電話で確認して予約を取っているのですが、電子カルテ端末上で確認できるようになれば予約効率が向上するのは自明です。また、検査予約は現在、MRIのみが対象ですが、将来的に骨密度測定の前予約化も検討しており、そのようになった暁には、電子的予約の必要性はますます高まるはずですよ。

なお、予約は患者動向状況の共有同様、スタッフ全員が電子カルテ端末上でリアルタイムに確認できる形で電子化させたいと考えています。

——将来的に電子カルテデータを何に生かしていきたいとお考えですか。

私は以前から「熊谷市から世界へ向け」をスローガンに国際学会や論文発表

に取り組んでおり、その研究基盤として、ゆくゆくは電子カルテ情報をデータベース化したいと思っています。もちろん、電子カルテの情報は研究発表だけではなく自身の学習にも二次的に活用し、さらなる診療の質向上を目指していきたいとも考えています。

Doctor



松田 芳和（まつだ よしかず）氏

1994年富山医科薬科大学（現富山大学）医学部卒。軽井沢病院、独「Vulpus Clinic」研修、米国「Florida Tampa General Hospital」留学、湘南鎌倉人工関節センター等を経て開業。